

青柳和身先生 猪平 進先生 黒川博先生 記念号によせて

青柳和身先生、猪平進先生、黒川博先生の御三方が、本年3月、本学を退職されます。御三方は、本学の発展に力を尽くされ、また学問の府としての本学の名を大いに高められました。

青柳和身先生は、静岡県の御出身で、京都大学経済学部を卒業後、大学院経済学研究科へと進まれました。博士課程修了後、鹿児島経済大学、九州国際大学で教鞭をとられ、1998年に本学に着任されました。本学では、西洋経済史、歴史学、ゼミナールを担当され、談論風発、自由豁達な御人柄で、学生に人気のある教員の御一人でした。

先生の御専門、研究課題は、資本主義的生産様式を経済史学（広義の経済学）の視点から総体的に把握することであり、初期は、ロシア革命期の「農業・土地問題」の歴史的解明を主に研究されていました。しかし、経済史研究において、ジェンダー史的研究の重要性を痛感され、「生殖的両性関係（ジェンダー）を基礎とした性差別は、資本主義的生産様式に内在的な要因であるか否か」という問題について『賃労働』再生産体制には、女性の生殖能力に対する経済外強制（生殖強制）が不可欠である」という仮説を歴史的及び経済学的に検討され、『フェミニズムと経済学』という大著を著されました。先生の旺盛な研究意欲はとどまるどころを知らず、「晩年マルクスの歴史観がジェンダー史的研究に接近している」ことを明らかにされるとともに、『『短い21世紀』の史的総括と21世紀の社会主義展望（1）～（5）』（岐阜経済大学論集）において21世紀社会の動向予測を歴史的に検証することを試みておられます。グローバル資本主義社会の批判的検討の研究成果として、先生の今後の研究結果を同学の者として心待ちにしています。

猪平進先生には、シミュレーション論、情報管理基礎・応用、モデル分析論など多くの講義を担当していただきました。先生は、長崎市のお生まれで、1970年、静岡大学大学院工学研究科電子工学専攻修士課程修了後、日立製作所中央研究所に入社されました。1991年、同中央研究所を退職され、本学に助教授として着任されました。

日立の研究所時代の御研究については、門外漢の私には十分な理解は及びませんが、専

門の電子工学の幅広い研究の他に、技術、技術史に関する論文を数多く残しておられます。2年前の福島原発事故を思い浮かべるまでもなく、科学技術が進歩すれば、ブラック・ボックスの中が見えなくなり、危険や弊害も大きい、という警鐘を鳴らす工学技術者としての先生の良心・社会的責任を表明する姿勢以外の何ものでもありません。本学就任後の御研究は、シミュレーション論を担当されていたこともあって、環境問題の観点から、世界各国のエネルギー需要予測モデルの開発、そして脱原発、脱成長社会に向けたエネルギー源別需要予測モデルの開発へと発展されています。それらの成果の一部は院生との共同論文として発表され、指導熱心な良き教育者であられたことを窮い知ることができます。

黒川博先生は、北海道のお生まれで、立教大学経済学部を御卒業後、企業に就職されましたが、向学心止み難く、立教大学経済学研究科に再入学され、満期退学後、青森大学経済学部へ赴任されました。本学には1986年に着任され、爾来、教務部長、経営学部長、そして学長を2期（6年）務められました。特に学長在任中は、開学40周年記念事業を成功裡に導かれるとともに、地方私立大学を取り巻く厳しい環境の中で、本学の経営の中核をなすスポーツ経営学科の設置にも御尽力いただきました。

先生の研究課題は終始一貫して振れることなく、アメリカ鉄鋼企業の経営について、企業家あるいは労使関係の視点から、第2次大戦後までを実証的に考察された成果が『U.S. スティール経営史——成長と停滞の奇跡』で、博士号を授与されています。現在も、大戦後のアメリカ鉄鋼業の衰退の歴史的推移について研究を続けておられます。

日本の大学が、厳しい環境の中で、大きく変ろうとしているとき、豊かな学識と経験をお持ちの御三人の先生方が大学を去られることは、私どもの大学にとって大きな損失であり、残念でなりません。先生方の一層の御健勝と御活躍を祈念するとともに、これまでと渝らぬ御助力を願ってやみません。

先生方の御功績を永く記念するため、本号をもって記念号といたします。

20013年3月

岐阜経済大学学長 石原健一
岐阜経済大学学会会長